九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

多文化クラスにおける学びのモデル : 関係構築と文化スキーマ理論に着目して

藤, 美帆

https://hdl.handle.net/2324/1440995

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（4）

多文化クラスにおける学びのモデル
—関係構築と文化スキーマ理論に着目して—

藤　美帆

要　旨

本研究は多文化クラスにおいて,日本人大学生(以下日本人学生)と外国人留学生(以下留学生)の関係構築の観点から,そこで得られる学びのプロセスを明らかにした実証研究である。多文化クラスとは,「様々な背景をもった学生が参加し,ディスカッションやグループアクティビティをとおして,異文化理解教育を行うクラス」と定義されている。多文化クラスは,1990 年代以降「日本事情」の一形態として実施されてきたが,定められた指針がなく,「どのような力を育成しようとするのか」に関する議論が不十分であると指摘されている。そこで,本研究はクラスデザインに資する示唆を得ることを目指し,九州大学での実践を事例として,多文化クラスにおける学びのプロセスの理論化を試みた。

第 1 章では,多文化クラスの目的,教育効果の整理を中心に,先行研究を概観した。その結果,多文化クラスの目的としては「文化的・社会的視野拡大」,「コミュニケーション能力育成」,「交流」が報告され,教育効果としては「意識変容」や「関係構築」が報告されていることが分かった。さらに,「関係構築」には「意識変容」が関連していることを示唆した研究もある。ここから,多文化クラス受講による「意識変容」が何らかの形で「関係構築」に結び付いているのではないかと考えられる。しかしながら,多文化クラスにおける日本人学生と留学生の関係構築に関する研究は,授業終了直後の一時的な状況の報告にとどまっている。そのため,「多文化クラスにおける学びは,どのような過程を経て得られているのか」そして,「それが受講生の関係構築にどのように反映しているのか」については明らかではない。そこで,本研究では日本人学生と留学生の関係構築に着眼し,多文化クラスの学びについて論じることとした。

第 2 章では,本研究が「関係構築」に着眼した背景に迫るため,留学生のホスト国との関係構築に関する先行研究を概観した。その結果,留学生と日本人学生との親密な友人関係構築が,困難と必要性を同時に抱える両義的な存在であることが示された。このような状況において,多文化クラスには日本人学生と留学生の関係構築に関する問題に働きかけるという社会的要請が高まっていると考えられる。

第 3 章では,本研究が依拠する理論的枠組み,質的分析に関する立場,用

語の整理を行い,第 4 章ではデータのフィールドの特性を述べた。これらの前提のもと,次の【研究 1】～【研究 4】の研究を行った。

第 5 章と第 6 章では,【研究 1・2】として多文化クラスでの学びや経験を明らかにするために,多文化クラス受講一定期間を経た日本人学生と留学生を対象としたインタビュー調査を行った。その結果,日本人学生の場合は「生活の中でかかわる身近な留学生と親しくなる」という形で留学生との友人関係構築に多文化クラスでの学びが反映していることが示唆された。一方,留学生は日本人と交流するうえで必要な文化スキーマ(ある国・地域に生まれ育ったものが,長期記憶として獲得するその国・地域で生活していく上で必要な様々な知識・情報)に触れ,それが日常的にかかわる周囲の日本人学生との交流の円滑化につながっていることが示唆された。従来は,多文化クラスで構築した受講生同士の関係性が受講後一定期間を経ても持続し,発展を遂げていくことが期待されてきた。しかし,本研究の結果からは,受講生は多文化クラスで得た学びをいかし,日常的にかかわる周囲の人々との異文化交流の輪を広げていることが明らかになった。これは,多文化クラスを受講した成員同士の関係性が深まるという先行研究での指摘とは異なる新たな視点である。

そこで,第 7 章では【研究 3】として多文化クラス受講による留学生の文化スキーマ獲得の可能性を明らかにするために,多文化クラスのグループ活動ではどのような話題が多く出現するのかについて調査した。そして,その中に文化スキーマ獲得に寄与する話題が出現するか否かについて分析した。その結果,特定のディスカッションの課題を与えた場合,文化スキーマにかかわる話題を含む共通話題項目が多く出現し,留学生が文化スキーマ獲得に寄与する話題に触れていることが明らかになった。

それを踏まえ,第 8 章の【研究 4】ではそうした学びに至る過程を明らかにするために,文化スキーマ獲得に寄与する話題はどのような会話の流れの中で出現するのかについて調査した。そしてまた,文化スキーマにかかわる話題に日本人学生も触れているのかに関しても合わせて分析した。その結果,「過去のエピソードを紹介する文脈で文化スキーマに寄与する話題が出現する」という傾向が確認された。そして,日本人学生にも同様の結果が得られ,日本人学生と留学生の双方に文化スキーマにかかわる学びが得られていることが明らかになった。

第 9 章では,これらの研究結果をまとめ,本研究が事例としてとりあげた実践における学びのモデルを提示した。第 9 章のモデルでは,「安心感」との相互作用によって「異文化間コミュニケーション」が活性化し,それによって「意識変容」と「文化スキーマ獲得」という学びがもたらされること,そして,それが日本人

学生と留学生との意識を隔てている「垣根の低下」や「常識のズレを埋める」ことに寄与し,「日本人学生と留学生の関係構築」につながっていることが示された。ここから得られた示唆として,本研究では「異文化間コミュニケーションの活性化」を促すことを多文化クラスのクラスデザインにおける一つの指針として提案したい。